Rudi Colloredo-Mansfeld,

The Native Leisure Class: Consumption and Cultural Creativity in the Andes.

Chicago: University of Chicago Press, 1999, xv+259pp.

新木秀和

I

アンデスの民族や地域性に関する研究には，内外でかなりの蓄積がある。考古学や人類学，歴史学といった分野から，現代の政治経済や社会にかかわる地域研究に至るまで，研究の裾野は拡大かつ深化してきた。冷戦終結後の1990年代になると，経済自由化とグローバル化の進展に伴い，その主流をなす先住民族関連の研究においても，土着性（ローカル）と世界性（グローバル）の相互作用や，近代のなかの伝統，あるいは伝統のなかの現在という側面を視野に入れることが要請されるようになっている。かかる観点は経済人類学や消費社会論にも新たな地平を開きつつある。そうした成果のひとつが本書『土着の有閑階級』なのである。

本書が対象とする先住民族オタバロ（Otavalo）の生活世界は，エクアドル北部のアンデス高地に展開する。首都キトから北方へ100キロメートルほどいったところ，かたわらをパンアメリカン・ハイウェーが通過し，サンパブロ湖とインバブラ山に抱かれた大地に，彼らの共同体は存在する。ただ一口にオタバロといっても，メスティソと先住民が共存するオタバロの町と，その北側に点在する先住民オタバロの村々（ペグチェ［Peguche］，キンチュキ［Quinchuqui］，アガト［Agato］，アリアスーコ［Ariasucu］，ラ・コンパニア［La Compañía］などの集落）とに分かれている。前者は先住民の手工芸品を扱う土曜市で知られるが，それらの商品を生み出すのは，先住民たちが居住する後者の村々であり，彼らは機織りなどの生業に従事する。本書の舞台となるアリアスーコは後者に含まれる先住民の村である。

先住民・インディオという言葉と，それが喚起するイメージから，彼らは「虐げられた弱者」，「土地に縛られた農民」とみなされがちである。アンデスの民が対象になると，とくにその傾向が強い。しかしながら，グローバル化が進む現代世界においては，人間の生活や活動もローカルな場に限定されない可動性や流動性をそなえるようになっており，先住民族にもこうした状況は決して無縁ではありえない。いや，グローバル化を先取りするように世界をまたにかけ，差別や抑圧のなかにあってもしたたかに生きているアンデスの民がいる。アメリカ大陸で最も経済的に成功した先住民族といわれ，越境する民，商人としての代表的存在なのが，本書の対象オタバロである。

本書は博士論文に基づく著作である。著者コジョレド＝マンスフェルド（1965年生まれ）は，人類学者としてだけでなく，妻とともに，自ら織工としてアリアスーコで働き，フィールドワークを行った。この経験が本書の叙述にユニークな観察と展望を与えている。

II

本書の構成は次のとおりである。

プロローグ：グローバル経済下のアンデス的生活
第1章　富裕性，消費，および文化的即興性
第2章　外部者の富――人種と進歩――
第3章　「無用のモノ」――生活維持の倫理と土着のアイデンティティ――
第4章　オタバロのトランスナショナルな群島
第5章　消費者としての職工――商業的な帯織業――
第6章　土着の有閑階級
エピローグ：アンデスにおける消費と文化集中

以下，内容にそくして本書の特徴を紹介していこう。

まずプロローグでは，経済・文化的なグローバル化という現実とアンデスというローカル世界とを行き来するオタバロの状況が説明され，本書の構成と目的が示される。オタバロたちは1940年代から，市場を求めてトランスナショナルな展開を繰り広げており，5000人ほどが文化的故郷（共同体）から離れた行商上のディアスポラ（trade diaspora）として，国外に居住滞在しつつ，エクアドル国内はもとより南米の周辺諸国や欧米諸国中にそのネットワークを拡大させてきた。外部者（とくに人類学者や，民族芸術に興味をもつ外国人観光客）の関心を引く彼らの要素としては，その外見つまり独特の衣装，そして織物と手工芸品を行商する企業家精神の２つがあげられる。こうした経済活動の結果，過去数十年間に，資本蓄積をはたして中間層になる者がオタバロの間から出現している。

このように概観した著者は，オタバロをめぐる神話と現実を，経済慣行とくに消費慣行がもつ物質文化の社会力の観点から明らかにすべく，儀礼・文化行為としての消費という側面に注目する。そして，オタバロの経済発展を導いた価値観は何か，またそのアイデンティティと権力のネットワークを生み出す社会的媒体として，彼らがいかに物質文化を利用しているのか，といった疑問点を提起している。

まず第１章では，本書の理論的な背景として，富と文化変容の関係，とくに消費の社会的役割が注目される。文化変容のプロセスは偶発的，官能的で，束の間であるとし，そのモデルとして「文化的即興性」という概念が提起されている。著者はこれを，文化従属ないし文化強化という従来の両極的な文化変容モデルに代わるものと位置づける。

つづく第２章と第３章では，経済活動についての道徳的・文化的な原則が検討される。エクアドル社会では，白人メスティソの中間層による先住民への民族的な差別が，「きたないインディオ」というイメージを用いる「衛生上の民族差別」となり，構造的権力の一形態として機能してきた。オタバロもまたそうした状況下におかれた。第３章では，貧しい先住民たちが，こうした民族差別イデオロギーをいかに転換させたかが述べられる。オタバロを含む先住民たちは，自らの「実りなき生活」や「無用のモノ」を強調しがちだが，これは問題が衛生面ではなく階級面にあることを示す。またその語りは，生存維持的な慣行と先住民のアイデンティティが継続的な重要性をもつことを主張している。

これに対し第４章と第５章は，先に提起した「文化的即興性」の具体例を検討する。第４章では，親族に基礎をおくトランスナショナルな，オタバロの商売ネットワークの制度化に注目する。そうした「グローバルな群島」は，国際的な市場群ニッチ（生態学的な垂直統御モデルに比されるもの）のなかで経済的戦略を追及する国外滞在者を伴うが，その一方で，商品流通と，家族的祝祭における儀礼化された消費のゆえに，共同体につなぎとめられてもいる。1980年代になると成功者の商人たちは経済危機下のエクアドル，そしてアリアスーコ（故郷の共同体）へと帰ってくる。第５章では，そのような帰還者たちがいかに近代的な帯（ファハ［faja］）織業をつくり出したかが検討される。彼らは利潤の最大化と，家内労働者に対する道徳的義務を調和させようと試みてきた。

こうした一連の経済活動の結果，オタバロ社会において経済的・空間的な格差が生まれ，「土着の有閑階級」が台頭しつつあることが，第６章において示される。インディオ文化へのコミットメントを目的にする消費が，意図に反して歪曲し，故郷としてのオタバロの重要性や農業的価値観をむしばんでしまう，という逆説的な過程が跡づけられている。

このような分析と検討に基づき，「アンデスにおける消費と文化集中」と題するエピローグでは，本書の結論と主張がまとめられる。その中心軸は，文化集中という概念である。つまり，社会変動がもたらしたのは対外的な文化の従属でも，あるいは均質的方向への文化の強化でもなく，むしろ新しい分化・分裂の可能性であり，経済集中や資本集中という概念にならえば，それは文化集中と呼びうるプロセスなのである，と。

III

本書は，アンデスの先住民社会をとりまく近代性やダイナミズムを浮き彫りにし，ステレオタイプ的な見方に反省を促している。経済や社会の変動の結果，オタバロの社会や文化にも階層化・多元化が進みつつあるが，著者はそれを，新たな階級文化の発生，そして先住民の「有閑階級」の出現ととらえている。

理論的な側面も含め，以下にコメントや批評を試みることにしよう。

本書は，消費という物質文化的現象への知的関心および固執から，先住民オタバロを対象に，「経済と文化」という普遍的なテーマに迫ろうという知的探求の成果である。「消費とは何か」という問いは，従来の経済学の枠組を超えるテーマであり，経済人類学や消費社会論という学際領域において正面から議論されてきた。グローバル化が進む現代社会においてその射程は，高度消費社会だけでなく，先住民社会へも拡大してきたこと，また拡大深化すべきことが，まず本書のメッセージとして読みとられるべきであろう。といっても本書は，オタバロ社会を固定した静態的な時空間におし込めている訳ではない。人の移動，群島のように分散した商業ネットワーク，伝統と近代の間をゆれ動く複合的なアイデンティティ，そして経済文化の格差から生まれる「有閑階級」的存在の出現など，総じて今日的な現象が俎上に載せられており，その視点は柔軟かつ多角的である。

民族誌の常として本書では，理論的な考察とフィールドからの具体的な観察とが溶け合うような形で叙述がなされている。数々のオタバロたち（とくに中心的存在であるモニカ［Monica］とガロ［Galo］の一家）の生きざまやエピソードは，読みものとしても興味深く，また著者が自己の体験を語るときに表われるとまどいや驚きの新鮮さもよく伝わってくる。なかでも特徴的なのは，著者が具体的な「モノ」の存在に注目し，その役割や意味に自覚的であるという点であろう。実際，モノへのこだわりが，機能や構造，あるいは精神活動という「見えない側面」をかえって浮き彫りにすることがある。それはまたモノの存在とは不可分である，コトバへの注目をも促す。本書の第3章では，オタバロたちが口にする「無用のモノ」（yanga cosa）や，「実りなき生活」（yanga kawsai）という言葉／言説と，それに託された具体的なモノの力についての議論がなされている。グリンゴ（白人の米国人）である著者自身には理解が困難だったという告白が書きつけられているが，オタバロ社会では，モノに秘められ，それに託して語られる「見えないもの」が重要な存在として力を発揮している。これは，交換や生産という面だけに目をそそいでいては決して見えてこない，人間の「経済」的行為といえよう。

もっとも，従来の経済学の立場から見れば，そうした視座が具体的な分析にどう反映しているかが問われるであろう。著者は，オタバロたちの消費活動の実態をとらえるべく，アリアスーコにおける家計調査（32の家計が対象）やインタビュー調査を実施し，図表にまとめている。ただそうした分析の結果については提示に終始し，さほど突っ込んだ議論を行っていない。それは，消費などの現象に関する別の章での理論的検討とは対照的なほどである。そもそも数値データの取り方や論じ方などの点で，経済学徒に不満を与える箇所も残されていよう。

次に「エスニック・ディアスポラ」という現象だが，これは現代世界において多くの民族に見られる現象であり，ラテンアメリカ地域についてはグアテマラのマヤ系先住民や，日系人のデカセギの場合などに，同様の状況が指摘できよう。そこでは人の移動に伴う生活やアイデンティティのあり方が注目されているが，著者のように具体的なモノにこだわるならば，かかる状況から何が見えてくるであろうか。本書は，オタバロたちのトランスナショナルな民族・親族ネットワークを取り上げるなかで，経済活動（機織りと行商）を俎上に載せ，オタバロという共同体の場との関連でモノについて詳述する。しかし他方で，国境を超えた彼らの群島のなかでそうしたモノの意味と場がどんな状況にあるのか，という点は議論されていない。もちろん，そうした試みを行うには，観察者もまたオタバロたちと行動をともにし，

ボゴタやロサンジェルスやアムステルダムなどの各地を移動し，そこで生活しなければならず，本書にその責を負わせることはできない。とはいえ，人の移動に伴いモノも移動するのだから，新たな空間と場においてモノがどんな役割と意味をもつのか，この点にも何らかの見解を示してほしかった。ないものねだりの注文かもしれないが，今後のオタバロ研究には研究者自身のフットワークと視座の柔軟性が要求されるだろう。

またオタバロたちの経済活動には，今日，外国人向けの観光という要素が強まっており，この点は本書でも指摘されている。ただ，従来からエクアドル社会で彼らをとりまいてきた差別の眼差しに加えて，「外部」からのエキゾチシズムや好奇の眼差しが重要性を増してきたことにも，注目すべきである。先住民をオーセティックな存在（ホンモノ）とばかり見なすと，たとえばオタバロ織のブランドが実は，観光客の眼差しを強く意識しているだけでなく，ヨーロッパのデザインをとり入れた「伝統」ですらある［山本 1999］，という現実が見過ごされてしまう。「新しい民族誌」といいうる本書においても，こうした眼差しの相互作用という面の追求は弱いという印象をもたざるをえない。モノとのかかわりは，身体性や語りとともに，視線の問題でもあるのだから。

Ⅳ

社会経済危機にみまわれた世紀転換期のエクアドルでは，その打開策として2000年半ばからドル化政策（現地通貨スクレの廃止と米ドルの導入）が断行されている。まさにその渦中にある9月半ばの週末，キト滞在中の評者は，バスを乗りついでオタバロへ，そしてアリアスーコへと足をのばしてみた。ごく短時間ながらアリアスーコの通りを歩き，本書を手に著者の足跡を求めたのである。休日で機織りの現場は目にできなかったが，何人かのオタバロたちと話を交わすなかで，著者や本書の登場人物のことが話題に出た。オタバロの町とは違い，ここまでやって来る外国人はほとんどいないらしく，本書を興味深そうにながめる人々の姿が印象的であった。

貨幣や通貨が使用されるのは，経済活動上の交換という面だけでなく，生活維持や社会秩序の存続のためでもあり，そこに消費という象徴行為との関連が生まれる。ドルの侵入は，先住民社会（の消費慣行）にどのような影響を与えるのだろうか。もっとも，国民経済の枠を越境するオタバロ（商人）にとって，他の多くの先住民族とは異なり，ドル＝外貨はこれまでも身近な存在ではあった。その意味では，彼らがドル化に対応するのはさほど困難がないように思われる。いずれにせよ，急激なグローバル化に伴う，ドルの全面的な侵入という新たな事態が，オタバロ内部に兆す「階級分化」の状況や彼らの民族アイデンティティのあり方をどう変えていくのか，いかないのか。これは大いに注目されるべき点といえる［新木 2001］。

本書のタイトルは『土着の有閑階級』である。前述のような消費社会論の状況をふまえ，消費をめぐる人類学的研究と，文化的創造性という著者の主張をうまく表わすものとして，このタイトルが選定されたにちがいない。しかしながら，本書においてはこの「有閑階級」という概念自体に関する議論はほとんどなされていない。周知のように有閑階級という概念は，19世紀末にヴェブレンの著書『有閑階級の理論』によって確立された［ヴェブレン 1998］。顕示的消費という考え方がその中心軸にあった。それ以来，土着の民・先住民族には有閑階級という概念は無縁，あるいはなじみが薄いものと見なされる傾向があった。これに対し本書は，かかる概念が彼らと決して無関係ではないことを示そうとしている。「有閑階級」という概念に「土着の」という形容詞をつけたのは著者の独創であろうし，とくに強調したい点は，先住民族のなかに有閑階級が出現してきたという文化現象なのであろう。しかし本書では，消費，階級文化，文化集中などの概念は詳細に検討されているが，その一方で，「土着の有閑階級」という名づけに込められた意図と問題提起とは必ずしも明示的ではない。この点は残念である。

オタバロに関する研究は日本では少数にとどまるが［高野 1990；山本 1999］，エクアドル国内および欧米ではかなりの質量が蓄積されてきた。もはや研

究すべきことはやり尽くされたと言う声もあるオタバロ研究において，著者は，物質文化や消費への注目という新たな見地に立って，研究の地平を拡大させた。近年のオタバロ研究は，共同体ごとの実証研究を積み上げ続けており，例えば，エクアドル中央アンデスの精力的なフィールド研究でも実績があるコロフキンは，カラブエラ(Carabuela)村を対象とした論文で，生産と文化の関係を扱っている[Korovkin 1998]。本書とあわせると，生産と消費という経済活動の両面について研究が進展しているわけだが，グローバル化や文化の現在性を十分に意識したそれらの研究は，人類学や経済学や現代史などの境界領域に広がる地平を，積極的に開拓しようという意図をもちあわせている。そうした潮流のなかで本書は，地道なフィールドワークと実証的態度に，グローバルとローカルの両極・多角的な視野から，経済人類学のみならずアンデス地域研究にも新たな知見を提供している。これは疑う余地がない本書の特長である。

本書が提起する展望と課題を十分に咀嚼できないまま拙い批評を書きつらねてきた。評者の非力による消化不良や誤読があるかもしれない。本書を導きの糸として，アンデス研究が一層発展していくよう期待しつつ，筆をおくことにする。

文献リスト

〈日本語文献〉

新木秀和 2001.「ドル化と通貨の生態学」『イベロアメリカ研究』第XXII巻第2号 上智大学イベロアメリカ研究所.

伊藤眞 1997.「消費と欲望の形成」『「もの」の人間世界』岩波講座文化人類学 第3巻.

高野潤 1990.「誇り高きオタバロ」『季刊民族学』53 千里文化財団.

山本誠 1999.「ブランドになった民族——エクアドルのアンデス高地民オタバロ——」鈴木清史・山本誠編『装いの人類学』人文書院.

ヴェブレン，Th. 1998.『有閑階級の理論』(高哲男訳) ちくま学芸文庫 (原書1899年).

〈外国語文献〉

Korovkin, Tanya 1998. "Commodity Production and Ethnic Culture: Otavalo, Northern Ecuador." *Economic Development and Cultural Change* 47 (1).

(神奈川大学外国語学部専任講師)